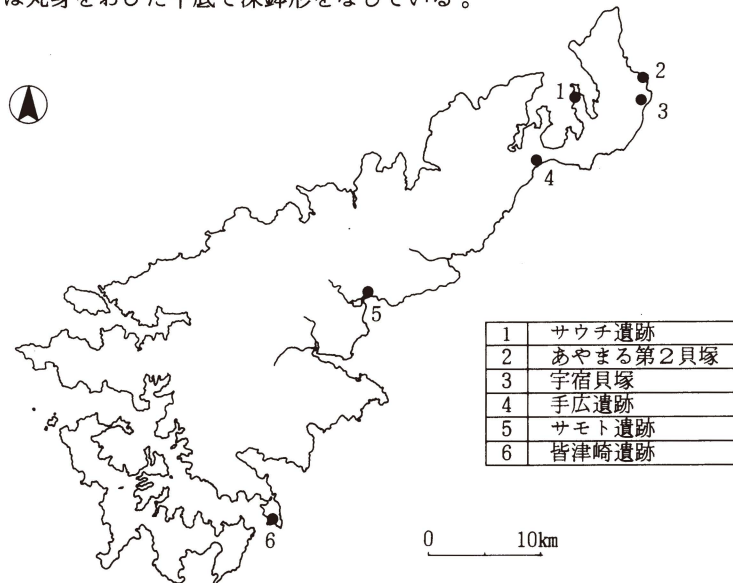


## 第2節 外耳土器

本遺跡から出土した外耳土器は、4点である。頸部近くに半円をなす外耳と木ノ葉形をもつもの、リボン状をなすものそして貼り突け凸帯状に少しあるものなどがこれまで奄美で出土している。その数は決して多くはない。沖縄本島においても南部から宮古、八重山に集中しているが、本島北部にはその数は限られているという<sup>注1</sup>。沖縄からトカラ列島にかけての外耳土器は宇宿上層式土器と同時期ぐらいから出現し、その下限は沖縄グシク時代まで及び、その形もいくつかの形に変化して来ている。奄美で出土している外耳土器は発掘資料でサウチ遺跡<sup>注2</sup>、宇宿貝塚<sup>注3</sup>、手広遺跡<sup>注4</sup>から出土している他、表採資料として竜郷町手広遺跡<sup>注5</sup>、瀬戸内町皆津崎遺跡<sup>注6</sup>、住用村サモト遺跡の資料がある。この資料もアーモンド状の形、アーモンド状の形に中央が凹みラクダのコブの形、杏仁形、粘土ヒモ状のものでU字形を持つものなどバラエティである。これらの外耳土器の資料が増えるにつれ、今後検討される資料の一つとなろう。

外耳土器全体の器形はそのほとんどが破片のみで不明であるが、竜郷町手広遺跡より表採されている。この資料は里山勇廣氏が発見し、復元作業のため実見する機会を得た。後日里山氏によって紹介されよう。発掘資料で全器形が復元出来た資料として同じ手広遺跡から出土している。この資料は丸身をおびた平底で深鉢形をなしている。<sup>注7</sup>



第52図 外耳土器出土遺跡分布図

## 参考文献

- 注1. 昭和59年1月，沖縄県立博物館学芸員知念勇氏より御指導いただいた。  
 注2. 「サウチ遺跡」 笠利町教育委員会  
 注3. 「宇宿貝塚」 笠利町教育委員会  
 注4. 「手広遺跡発掘調査」 竜郷町教育委員会  
 注5. 奄美考古学研究会員里山勇廣氏発見  
 注6. 瀬戸内町教育委員会の資料で町中央公民館に展示されている。  
 注7. 手広遺跡発掘調査で確認。調査概報作成中